



県立広島大学 Prefectural University of Hiroshima

地域連携センター報

Vol. **27**

COMMUNITY LIAISON CENTER

平成30年10月15日発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号 電話082-251-9534 E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

早稲田大学 地域・地域間研究機構と協定を締結

6月1日、広島県庁北館第1会議室において、本学地域連携センターは早稲田大学地域・地域間研究機構と、研究活動や地域貢献活動など、相互協力が可能な分野において、相互支援・協力に関する協定を締結しました。本学地域連携センター 市村匠センター長、早稲田大学地域・地域間研究機構 弦間正彦機構長によって調印が行われました。

連携協力事項は、(1)教職員間の研究教育交流に関する事項、(2)地域貢献事業の共同実施に関する事項、(3)(1)と(2)に関連した教育プログラムの開発に関する事項、(4)共同セミナー等の開催に関する事項、(5)その他、双方の研究活動並びに地域貢献上、有益な事項です。研究活動は、本学に平成28年度から設置が開始されたプロジェクト研究センターを中心に、各学部の教員の研究シーズと早稲田大学教員の研究シーズのマッチングを行い、共同研究を実施します。地域連携活動については、広島県内においてフィールド活動を協働実施する予定です。今後、早稲田大学においてプロジェクト研究センターを中心とした研究シーズ発表会を予定しております。



調印式の後、広島県庁本館6階講堂で記念講演会が開催され、早稲田大学人間科学学術院 柏雅之教授による「早



稲田大学の重点領域研究と県立広島大学との連携活動」と、生命環境学部 萩田信二郎教授による「“地域資源力”を生かしたプロジェクト事業に注力するということ」の2講演があり、これまでの活動内容や地域資源活用の成果について、報告がありました。参加者は188人となり、熱気にあふれた講演会になりました。

今後、本学の地域活動に早稲田大学のグローバルな視点を取り入れ、より活性化していく予定です。

大崎上島町との包括的連携協力に関する協定

2月1日、本学は、豊田郡大崎上島町との包括的連携協力に関する協定を締結し、同日、サテライトキャンパスひろしま（県民文化センター5階）において調印式を行いました。

これまで、大崎上島町と本学はレモンを使った健康づくりなどで連携してきました。今後はさらに取組の範囲を広げ、他の産業分野や人材育成の分野でも連携し、連携事業を通して学生の積極的な地域貢献活動を促すとともに、さまざまな形で地域との結びつきを強めていくことが期待されます。



広島キャンパス

HIROSHIMA CAMPUS

地域連携・産学連携

第2回国際産学連携交流会

第2回国際産学連携交流会（主催：本学地域連携センター、後援：中国経済産業局・広島県・ひろしま産業振興機構・しょうばら産学官連携推進機構・三次イノベーション会議・駐広島大韓民国領事館）を、2月9日の午後、県立広島大学2317講義室と講義室前のフロアにおいて、7件の発表と12件のポスター展示で実施し、本学の特許等を有する最先端研究や産学連携実績のあるテーマが紹介されました。

主な発表内容は、健康維持・増進、機能食品、環境、IoT（Internet of Things）・AI（人工知能）等で、発表は英語（一部日本語）で行われました。さらに、今回は本学の国際交流推進事業（短期受入れプログラム事業）で訪れたソウル市立大校の教員1名と学生6名も参加し、積極的な質疑応答が行われました。



発表会場の様子

なお、今回からポスター展示ではコンテストが実施され、参加者による投票の結果、2テーマ（Regional Community Built by Morning Market of River near Hiroshima Station, Adaptive Structural Learning of Deep Belief Network for Comprehensive Medical Examination Data）が同点で1位として表彰されました。

参加者数は、学外から14名、学内からは本学の学長、副学長をはじめとする教職員、留学生、学生等の41名でした。産学連携交流会の終了後、懇親会を実施し、本学の産学連携、国際交流の在り方などについて話し合い、引き続き交流を深めました。今年度は中国の大学との連携のもと、中国の教員・学生も交えて第3回国際産学連携交流会を後期に開催する予定です。多くのご参加をお待ちしております。



懇親会の様子

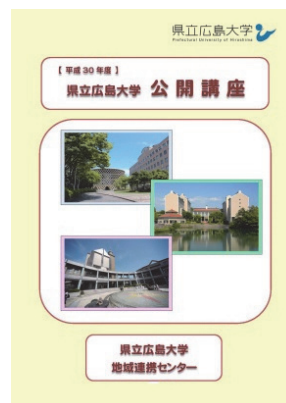
公開講座

公開講座パンフレット及びリーフレット発行

生涯学習分野で、平成30年度に3キャンパスで開講を予定している本学主催の公開講座及び学外組織との連携公開講座の年間スケジュールを掲載した「公開講座パンフレット」を発行しました。

また、キャンパスごとにそれをコンパクトにし、三つ折りで利用できるハンディなリーフレットも発行しました。

今年度、広島キャンパスで20講座、庄原キャンパスで6講座、三原キャンパスで22講座を計画しています。パンフレットやリーフレットを見た受講希望者から募集についての問い合わせもきています。



公開講座「即戦力となる人工知能人材育成のためのプログラミング講座～基礎編～」ほか

5月12日から6月2日にかけて、全4回にわたってAIやIoTを使った研究開発を目指すエンジニアを養成する講座を開講しました。

この講座では、Python言語の基礎と演習やKerasのプログラミング演習を中心に、教員2名に加えてTA（教育補助者）2名が受講者14名の指導にあたり、受講者が熱心に学習されました。



今、社会では「Society5.0」をキーワードとして、IoTで全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、課題や困難の克服を目指す動きが盛んです。また、人工知能により、必要な情報が必要な時に提供されるようになり、ロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題が克服されるとされています。

AIやIoTの学習ニーズは強く、今年度は、更に8月20日～23日の4日間にわたって、高校生を対象とした「高校生のためのAI・IoTプログラミング教室」も開講しました。

研究紹介

地域の医療介護総合確保推進で活躍する
マネジメント人材の養成

専門職大学院経営管理研究科 教授 西田 在賢

昨年10月に本学に着任しました。前任校の静岡県立大学では地域経営研究センターおよび分離発展した医療経営研究センターのセンター長として、静岡県から医療経営力向上事業を5年間にわたり委託され、同県内32の公的病院から延べ約200名の病院幹部が受講した講座を企画・運営しました。



さて、わが国では国民医療費と介護保険総支出を合わせると既に50兆円を超え、やがて国家予算に比肩する経済規模になると見込まれます。一方で、人口減少少本格化のため、医療介護保障の財政が年を追って厳しいものとなります。そこで国は先般より医療介護総合確保推進施策を行なっています。

私はこの改革推進で重要となる医療介護の制度政策や事業経営、そしてその成果を実践するための人材養成について研究しています。

今春、HBMS地域医療経営プロジェクト研究センターの開設が認められましたことから、この5月に研究センター開設記念セミナーを広島県庁講堂にて開催し、200名余りの医療介護関係者や行政関係者が集う機会を設け、盛況でした。



研究センター開設記念セミナー

食品油脂の結晶化とその制御に関する
研究

人間文化学部健康科学科 助教 石橋 ちなみ

マヨネーズやチョコレート、マーガリンといった油脂を多く含む食品は、長期保存や温度変化によって、見た目や食感が変化し、美味しさが低下することが知られています(図)。このような変化は、“油脂の結晶化”が大きく影響することがわかっています。油脂の結晶は、同一の化学組成であっても結晶構造が異なる“多形現象”をとり、なおかつ、食品に用いられる油脂は様々な種類の油脂から成るため、複雑な挙動をとることが特徴的です。私はこれまでに、食品油脂を対象として、油脂結晶化による製品劣化のメカニズムの解明や、劣化抑制のための油脂の結晶化制御の方法について研究を行ってきました。

今後は、油脂に限らず、結晶性を有する食品であるデンプン(米、小麦などの主成分)も研究対象として広げていきたいと考えています。具体的には、実際の調理・加工過程におけるデンプンの状態変化とデンプンの内部構造の変化との関連性を明らかにすることで、デンプンの内部構造に基づいた美味しさの予測を行い、最終的な品質の制御に繋げる研究に取り組んでいきたいと思っています。

正常なチョコレート(左側)と
表面が白化したチョコレート(右側)油が分離した
マヨネーズ

地域連携センターに知財担当教員が着任



6月より地域連携センターに着任しました安藤由典です。主に知的財産や外部資金受け入れなどを担当しています。研究の専門分野は再生医療・人工臓器ですが、これまで、上場企業、バイオベンチャー、病院、大学において研究開発、経営、教育などに携わってきました。

現在、本学では地域に根差した多くの研究が行われています。これらの情報を学外に発信し、地域の公的機関や企業と共同研究などの連携を積極的に推進することで、広島県発の新しい技術を創出できるよう、特に知的財産面を中心に支援していきたいと考えています。

庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

産学官連携

しょうばら産学官連携推進機構

6月11日に当機構の平成30年度理事会・総会を庄原商工会議所にて開催しました。約30名の出席者のもと、すべての議案について原案どおり承認されました。

今年度の事業方針は産学官連携の基礎である「マッチング」事業を特に重点的に進め、徹底した事業化支援や農商工連携に取り組みます。加えて、金融機関や関係団体等との連携を強化し、より成果の創出を意識した事業展開を図ります。

新たな取り組みとしては機構組織の見直し、有償委託契約制度の導入検討を進めます。



三次イノベーション会議総会

5月24日に三次市役所にて三次イノベーション会議総会を開催しました。本会議は三次市の産官学連携推進を目的に、三次市、三次商工会議所、三次広域商工会、本学が構成員となっています。総会では事業計画が原案どおり承認されました。本学教員紹介、三次市作木町をフィールドとした地域戦略協働プロジェクト事業が紹介されました。



公開講座

庄原市民公開講座

「身近な話から考える食と健康」をテーマに、庄原市教育委員会と本学の共催で市民公開講座を6月28日、7月5日、19日の日程で実施しました。7月9日にも生命環境学部 津田治敏准教授を講師に「お肉と健康」のテーマで実施する予定でしたが、豪雨災害のため、中止となりました。油、肥満、日ごろの食事という生活に密着したトピックから健康を考える講座となりました。本学の学生の受講もあり、森脇教授の回では広島キャンパスからも3名の学生が参加し、一層楽しい雰囲気です。講座が行われました。延べ88人の市民・学



生の参加があり、2回以上出席された27名の方に修了証書を渡しました。後期の庄原市民公開講座では平成という時代をふり返ります。

回	講座名	講師
1	油脂と健康	生命環境学部 准教授 山本幸弘
2	肥満とお腹の病気	生命環境学部 教授 稲垣匡子
3	明日から何を食べる? ～健康寿命を延ばす食事について～	人間文化学部 教授 森脇弘子

本学主催公開講座

本年度の有料講座として「食品を分析する・表示する～大学との連携のために」を庄原キャンパスで7月12日に3つの内容で実施しました。成分分析の依頼は大学に多くあり、その基本的な考え方や分析方法、分析結果の表示を学んでいただき、今後の事業者や市民と大学との連携を一層円滑にする目的で実施しました。甲村准教授からは野菜を分析する課題等を、馬淵助教からは最新の分析手法とその優位性を、吉野准教授からは新たな食品表示法について話がありました。学生も含め、聴講者は15名でした。一般申し込みの7名の方に修了証書を渡しました。全員の方から大変満足、満足、また今後役に立つとの回答が得られ、同様の講座を来年度以降も継続して実施したいと考えています。

回	講座名	講師
1	農作物の成分分析の難しさ	生命環境学部 准教授 甲村浩之
2	食品の新たな品質評価法	人間文化学部 助教 馬淵良太
3	食品表示法への対応を学ぶ	生命環境学部 准教授 吉野智之

言語文化生涯学習講座

3月1日からの4日間、本学庄原キャンパスにて12回目となる標記講座を行いました。「外国語は面白い!」という本講座の原点に立ち返り、あまり馴染みのない言語も取り上げ、その魅力と学ぶ楽しさを4名の講師が語りました。延べ36名の参加があり、皆さん大変熱心に聴講されました。

回	講座名	講師
1	はじめての古典ギリシア語	総合教育センター 准教授 大草輝政
2	モンゴル語とはどのような言語か	総合教育センター 准教授 河村和也
3	英語で発信する庄原	生命環境学部 教授 馬本勉
4	中国語の世界、中国語から見える世界	地域連携センター 准教授 上水流久彦

研究紹介

英語の口頭表現の教育方法とその開発

総合教育センター 准教授 クリングウォール・ディオ

これまでの主な取り組みは、
1) 口頭技量における流暢さの構成的性質に関する調査、構成要素の相対的重要性、2) 口頭能力評価における発表語彙の調査—オンライン口頭能力評価ツールの開発に向けて、3) 段階別読書と併せたりスニングに焦点を当てた指導です。



今後行いたい研究は、1) オンライン語彙プログラム、多読教材、伝統的な教科書コンテンツを組み合わせた集中語彙獲得コースの継続研究、2) ビデオレッスンでの同時字幕の活用、3) 特殊・学術目的の英語及び学術発表に焦点を当てた、学習者のための一連のテンプレートとデータベースの開発です。応用言語学（流暢性、会話能力、産出語彙）を深め、言語講師・研究者としてのスキルを引き続き伸ばします。

私が研究してきたことを役立て、地域に貢献したいと願っています。これまで私は、様々な英語での活動を企画しました。また、放射線災害復興のため、福島で研究者、学生、農家、避難者、自治体職員等と連携しました。

広島県立総合技術研究所訪問

庄原地域連携センターの企画として、2月26日に広島県立総合技術研究所の食品工業技術センターと保健環境センターへ、3月15日に農業技術センターへ、生命環境学部の教員、学生で訪問し、交流会を行いました。交流会では、総合技術研究所の職員と生命環境学部の教員の研究紹介を相互に行い、共同研究活動等に関して意見交換を行いました。また、施設の見学を行いました。

なお、2月26日は、西村和之 環境科学科長をはじめ、6名の教員、職員、並びに生命環境学部の学部学生17名と院生2名が参加しました。3月15日は、入船浩平 庄原地域連携センター長をはじめとする8名の教員、フィールド科学教育研究センターのスタッフ3名、学生8名が参加しました。今後、研究上の交流を深め、共同研究に発展させることを目的としています。このような組織間の交流は初めてで、互いに収穫のある交流会となりました。継続的に実施する要望も出ました。



模型を使っでの発表

地域連携 学校給食の食品廃棄物を肥料化する食品リサイクルグループ形成促進

地域において、消費期限切れで廃棄される物を含めた食品残渣を飼・肥料として利活用し、生産された食材を再びその地域の食材として消費する取り組みを食品リサイクルループと言います。

庄原市では、比較的まとまって排出される食品残渣を対象にした食品リサイクルループの構築を目指して、食品残渣の組成や排出量の調査を発案されました。本学では、平成29年度の地域戦略協働プロジェクト事業として上記の発案を受託し、庄原学校給食共同調理場と西城市民病院から排出された食品残渣の全量を2回ずつ計4回収集し、フィールド科学研究教育センター内で展開検査を行い、素材組成、元素含有量や栄養素等の分析に崎田研究室の学生が参加しました。

その結果、庄原市内全小中学校の食べ残し量は16.8kg/日であり、学校給食と市民病院から約2.3t/年の食品残渣が排出されることが示されました。これらの情報をもとに、小さなリサイクルループからのスタートであっても、食品リサイクルループを活用した食育や環境学習を充実させることの可能性を示すことができました。



展開検査の様子

三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

講演会

第2回(一社)広島県言語聴覚士会学術集会

6月3日に広島県言語聴覚士会学術集会が三原キャンパス大講義室で開催されました。「言語聴覚療法の可能性の探求～自分がなりたい言語聴覚士になるために～」をテーマに、本学教員・在学生・卒業生を含む広島県内の多くの言語聴覚士が参加しました。

志学館大学人間関係学部心理臨床学科 飯干紀代子教授を講師としてお招きし、「地域で暮らす認知症の人と家族に言語聴覚士ができること」と題してご講演いただきました。最新の研究結果をお示しいただいた上で、実践的な関わり方を分かりやすくお話いただきました。見逃されたり、「できない」と勘違いされていたりすることもある「認知症の人のコミュニケーション能力」を周囲が正確に理解し、生活の中で充分にお力を発揮していただくためには、言語聴覚士の支援が重要であるということがわかりました。「早速、これからの支援に取り入れたい」という参加者の声が多くきかれました。

また、日々のリハビリテーションの効果検証や今後の治療に活かせる研究について、県内の言語聴覚士が発表する一般演題発表では、本学の卒業生も卒業研究で取り組んできた、失語症や失読症の方のコミュニケーション支援を目的とするアプリ使用に関連した研究を発表しました。また、臨床現場における高次脳機能障害者の就職支援、嚥下に関する取り組みなどについても発表を行ない、参加者からは、「明日からのリハビリテーションで活かしたい」というご意見を多くいただきました。活発なディスカッションを行うことができ、県内各地で活動している言語聴覚士同士の連携を密とするための良い機会となりました。

まだまだリハビリテーションの専門職として認知度が高いとはいええない言語聴覚士ですが、成人や小児の言語障害、聴覚障害、摂食・嚥下障害、認知症などを対象に支援できる範囲は広いです。今後も地域の方々の健康維持、増進も含め、専門性を活かす取り組みをさらに広めたいと思っています。



学術集会の様子

地域連携

尾道市地域戦略協働プロジェクト成果報告

～尾道市シルバーリハビリ体操事業がもたらす様々な効果について～

地域戦略協働プロジェクトとは、本学と包括連携協定を締結している広島県内の自治体と協働でその地域の課題解決を図る事業です。理学療法学科では、2016（平成28）・2017（平成29）年度の地域戦略協働プロジェクトの一つとして、尾道市シルバーリハビリ体操事業についての効果検証を行いました。



シルバーリハビリ体操指導士に対する調査の様子

シルバーリハビリ体操とは2005（平成17）年度から茨城県で始まった事業です。まず、地域の高齢者の中から希望者を募り、シルバーリハビリ体操という介護予防体操を指導する指導士を養成します。その後、認定を受けた指導士は自分が住む地域で体操教室を開き、地域の高齢者に体操を指導していきます。このようにシルバーリハビリ体操は、高齢者が体操を通じて相互に介護予防を図る取り組みであり、尾道市では2013（平成25）年度から実施しています。

本プロジェクトでは、最初にシルバーリハビリ体操を指導する指導士自身に対する効果、つまり自助効果を検証しました。指導士の養成講習会は週2回、1日8時間の体操実技を交えた講習を4週間行います。今回は、講習会の受講前と4週間の受講が終了した時に調査を実施しました。その結果、受講前に比べ受講後の握力、片足立ち時間、不安感や生きがい感のアンケートが改善しました。1年後に再調査を行ったところ、握力や片足立ち時間はさらに改善を認めました。

次に、体操教室に参加している高齢者に対する効果、つまり互助効果を検討しました。体操教室に参加している高齢者を対象に2016（平成28）年と2017（平成29）年に調査を行ったところ、参加者の握力が

改善し、片足立ち時間は低下することもなく維持できていました。

これらの結果から、尾道市のシルバーリハビリ体操事業において、体操指導を行っている指導士への自助効果、および体操教室に参加する高齢者への互助効果があることが分かりました。

今後は、シルバーリハビリ体操の中長期的な効果を検証していきたいと考えています。

コツコツ健康増進車

保健福祉学部では地域協働型保健福祉学の実験的研究として、広島県の特産品であるレモンやエゴマの効果、佐木島（さぎしま）での体力調査、尾道市の地域課題であるシルバーリハビリの調査など、いずれも地域に密着した事業を行っており、エビデンスを蓄積しつつあります。特に生活習慣病や認知機能改善を柱として、身体的健康・健康寿命延伸のためのサポートを行っています。そこで、本研究成果を生かすのみではなく、これまでの取り組みのノウハウを活用し、健康増進車（骨密度・内臓脂肪等測定）による測定を広島県内で実施したいと考えました。

平成27年度特定健康診査受診率において、広島県は45.3%と全国平均49%を下回っており全国38位です。そして、先般公開された健康寿命（厚生労働省第11回健康日本21（第2次）推進専門委員会）においても男性は71.97歳で27位、女性は73.62歳で46位と低迷しています。これらの問題において、まずは、健康への意識付けが重要だと考えられます。上記のノウハウを生かし、広島県全域における健康調査を実施し、本学が主体となって個人個人の健康に対する自覚を高め、地域全体で健康なまちづくりに挑戦したいと考えております。健康に活躍できる人づくり、心身の健康・健康寿命延伸を本学が中心となり推進し、県全体に「健康まちづくり」の重要性を啓発していきます。また、大学祭・オープンキャンパス・大学説明会等の大学イベントにも積極的に参加することで本学の健康創生事業を周知・発信し、地域の健康寿命延伸に貢献していければと考えております。



コツコツ健康増進車

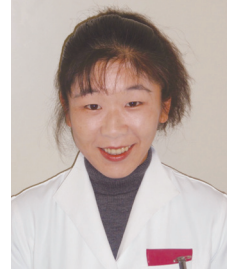
研究紹介

高齢者の嚥下・音声に対するアンチエイジング

保健福祉学部コミュニケーション障害学科 准教授 田口 亜紀

高齢者の嚥下障害に対する診療

わが国の2012（平成24）年における70歳以上の高齢者は2,259万人と、人口の17.7%を占めています。2011年人口10万人あたりの肺炎による死亡率が悪性新生物および心疾患に次ぐ第3位を占め、このうち94%が65歳以上の嚥下機能低下によるものとなっています。このように、加齢による嚥下機能低下は高齢者社会の到来とともに医療社会的にも大きな問題となっています。私は大学院で加齢による嚥下関与筋の機能低下の研究を行い、筋によっては加齢による影響を受けやすいものがあることを報告しましたが、加齢による嚥下機能低下のメカニズムや治療についてはまだまだ研究の余地があると思われます。私はこのような研究を進めていきたいと思っています。



診療の現場においても「高齢者の誤嚥性肺炎の減少」を実現させたいです。診療センターでは、高齢者の嚥下機能検査を施行し、必要であれば嚥下訓練のリハビリテーションを取り入れています。高齢者の施設に赴き、摂食指導や嚥下訓練の指導ができればと思います。また、離島や山間部などでの高齢者の嚥下機能の動態を調査したいと考えています。

高齢者の音声障害に対するアンチエイジング

加齢により声帯の痩せ（萎縮）が生じて発声時に息がもれ、声枯れが生じます。近年高齢者で声枯れを訴えて耳鼻咽喉科に受診する患者さんが増えて来ています。カラオケやコーラスをされている方も増えていきます。診療センターでは内視鏡を用いて声帯の状態を詳細に観察し、音声治療（音声訓練）が必要であればリハビリテーションを言語聴覚士とともにを行います。いわば、「声の筋トレ」です。自宅で毎日訓練していただくと声が改善する方も多く見受けられます。

このように、地域の高齢者の方に対して、嚥下・音声・聴覚という耳鼻咽喉科の領域で密着して取り組み、アンチエイジングの実現を図りたいと思っています。

ご案内 第16回脳を見るシンポジウム in 三原

テーマ：「感性による脳力アップ！（仮題）」 場所：三原リージョンプラザ文化ホール
日時：平成31年3月2日（土）13:30～ 参加費：無料

どなたでも参加できます。お気軽にお越しください。

平成29年度 地域戦略協働プロジェクト 学生参加状況

本学では、地域のみなさまの地域課題を解決するため、地域戦略協働プロジェクトを各自治体と共同で実施しています。すべてのプロジェクトに学生が参加し、教員とともに活動しています。

担当キャンパス	自治体	テーマ名	学生参加状況	学生所属
広島	江田島市	江田島産クロダイを用いた新商品開発と高付加価値化	クロダイの成分分析, レシピ作成, カキ祭りでの成果発表等	健康科学科 経営情報学科
	広島市南区	広島駅南口界隈の魅力に関する研究	朝市の参加者へのアンケート調査実施, 内容分析, 結果発表等	経営学科
庄原	庄原市	学校給食の食品廃棄物を肥料化する食品リサイクルループ形成促進	食品ごみの分類, ごみの種類や特徴の観察・整理, 湿重量の測定等	環境科学科
	安芸高田市	中山間における多文化共生社会の仕組みづくり	異文化理解入門講座における中学生のグループ討議の授業補助等	国際文化学科
	世羅町	空家を活用した地域振興	移住希望者に必要な情報を地区にプロットする為のデータ抽出等	生命科学科
	三次市	野草等の地域資源を活用した入浴剤の開発研究	植物材料の採取・配合, 「足湯」での確認, 発表会での報告等	生命科学科
三原	三原市	三原市の人権教育・啓発の現状と今後の方向性について	アンケート調査票の発送, 回収した調査票の内容確認・集計等	人間福祉学科
	尾道市	尾道市シルバーリハビリ体操事業がもたらす様々な効果について	介護予防事業における調査内容の説明, 体力測定, データ分析等	理学療法学科

学生参加状況の詳細は、地域連携センターの下記のホームページからも見ることができます。
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/renkeipjh29.html>



地域連携センター報は本学ホームページにバックナンバーを掲載していますので、ご利用ください。
 地域連携センターの活動についても、あわせてご覧ください。

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/>



編集後記

地域連携センター第27号をお届けします。本号では、早稲田大学地域・地域間研究機構との相互協定、大崎上島町との包括的連携協力に関する協定をはじめ、各キャンパスで取り組んできた地域連携に関する事業をご紹介します。これらはいずれも、従来活動の成果を踏まえて、より一層地域との結びつきを深めるなかから、さまざまな課題の解決をめざそうとする事業です。

引き続き、皆様方のご協力とご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。(Y. S.)

編集発行

県立広島大学地域連携センター [本号編集担当]

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
 電話(082)251-9534 / E-mail: renkei@pu-hiroshima.ac.jp
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/>

各キャンパス問合せ先

県立広島大学庄原地域連携センター

〒727-0023 広島県庄原市七塚町5562番地
 電話(0824)74-1704 / E-mail: gakuju@pu-hiroshima.ac.jp

県立広島大学三原地域連携センター

〒723-0053 広島県三原市学園町1番1号
 電話(0848)60-1200 / E-mail: mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp